
かめむし

高城西獅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かめむし

【Nコード】

N1070Z

【作者名】

高城西獅

【あらすじ】

手習い程度に書いてみた、思いつきのエッセイです
読んでいただければ幸いです

カメムシというやつは、本当に嫌われ者だと思う。

嫌われ者といえば家の中によく現れる定番の黒い害虫もいるが、アレは別におぞましいだけで、倒してしまえばなんてことない。その倒し方も殺虫スプレーでもよければ、粘着シートでもいいし、ホウ酸団子なんてテもある。果ては熱湯を身体に注ぐなどという、確実かつ残酷なものもある。

だが、カメムシの場合、そうはいかない。

理由は言うまでもない。あの臭気である。下手に手出ししようものなら、こちらが返り討ちをくらいかねない。

今日などは車を運転していると、車中のどこからともなく、それこそ何の前触れもなく、カメムシが俄かに羽音を立てて自分の方に飛んできたから、ビックリしてガードレールに車をぶつけそうになった。

すぐに車を路肩へ止めて、フロントガラスに張り付いたカメムシを車の外に出そうと思ったが、まずその方法が思いつかない。他の虫ならば、ティッシュでくるんでゴミ箱へ捨てられるし、例えばハチのような危険な虫でも、車中に置いてある雑誌でも使って、鋭く叩き落せばそれは然程に造作のないことである。だが、何度も言うようだが、カメムシの場合ではそうは行かないのである。

路肩に車を停めてみたものの、為す術のない私はとりあえず使えるものはないかと、車中を見渡してみた。が、何もない。

やむなく、ふと思いついて、今自分が履いている靴下を脱いだ。それをカメムシの方へそっと忍ばせてみた。

上手い具合に靴下の上に乗り移ってくれば、儲けもの。そのまま車外に出そうと思ったのだが、カメムシはお気に召さないのか、何度やっても、靴下を近付けるとクルリと反転して逃げていく。

カメムシほどの者でも、簡単には近付きたくないほど、自分の靴

下の方が臭いのだろうか、ちょっと心も折れそうになる。

その内に、イライラしてきて、そのまま靴下でカメムシを握って、外へ放り出したくなる衝動に駆られるが、それをするやつの思う壺なので、そうすることもできず、身悶えするような時間が過ぎ、遂にはカメムシは窓枠の狭い空間に逃げ込んで、どうにも手出しができなくなってしまうた。

カメムシというヤツは、臭気さえ気にならなければ、造作のない存在なのだが、私はこの臭いがどうやってもダメである。

でも、訓練すればあるいは気にならなくなるものなのかも知れない。

いつだったか、冬時分、私は趣味のゴルフを楽しんでいた。夏は芝があるのでボールがそのぶん地面から浮いていて、割と簡単にボールを打てるのだが、冬は芝枯れていてボールを打つ前に地面を打ってしまったたりして、素人には少し難しくなる。

そんなわけで、と言うと大いに言い訳なのだが、その日のスコアは確かに随分悪かった。スコアが悪いと、気分も悪い。

何が悲しくて、ストレスを溜めるために、大金払わなきゃいけないだと、釈然としない思いをしながら受付で清算していると、にわかにあの耐え難い臭気が鼻腔をついた。

見れば驚いたことに、ゴルフ場の従業員がクラブハウスの窓に張り付いている無数のカメムシ達を、割り箸でつまんでは何かの液が入ったビンの中に放り込む作業を熱心に続けているのである。ビンの中身はアルコールか何かだろうか？ビンに放り込まれたカメムシは、悶えているが、ビンから出てこようという元気は喪失しているらしい。

スコアは悪い。大枚は払わなきゃいけない。その上、帰り際にこの臭い。弱り目に祟り目とはこの事だろう。

それにしてもこの駆除作業、ゴルフ場からすれば、もちろん客に嫌な気分を味あわせたくないがこそものなのだろうが、そのせいで

クラブハウス内にこれだけ臭気が充満するとなると、一体全体、それが気遣いなのか嫌がらせなのか分からなくなる。お婆さんたちが作業に使っている割り箸は、なるほど自分の手にあの臭いが染み付くのを防ぐためのだろうが、一方で、明らかに身の危険を感じているカメムシ達は、捕まってるものかと盛大に臭いを振りまいているのである。守られるべきはお婆さんたちの手であって、どうも客の鼻腔の危機には気がつかないらしい。私は正直吐き気すら覚えた。

しかし、驚くべきことに、当のお婆さんたちは、まるでその臭気が気にならないかのような平然とした仕事振りなのである。

お婆さんたちはこの駆除作業をきつとシーズンに何度もやっているのだろう。楽しそうに笑いながら、作業しているお婆さん同士、談笑しながら忙しく箸を箸を動かしている。

人間というものは、訓練と慣れで、たいていのことはどうにかやってしまうものらしい。

カメムシといえば、実は思い出す友人がある。学生時代、小中と同じ学校だった亀渕という同級生の男子のことである。

私は彼の事を「亀ちゃん」と呼んでいたが、ファーストネームから引用して「みっくん」と呼ぶ友人もいた。しかし、いつ頃のことだったか、誰か目敏いヤツが韻が変わらないことに気付いたものだろう。一時期「かめむし」と呼ぶ輩が横行していた。

さすがにあまりのあだ名なので、私もほとんど言ったことはなく、他の友人達もほとんどそれを呼ぶことはなかった。

しかし、その禁じられたあだ名のせいで、中学一年の冬に事件が起きた。

その日、私は早めに部活が終わって、飼っていた犬の散歩をしていたのだが、その道で部活が終わって家に帰っている亀ちゃんに会った。私と亀ちゃんは小学6年の時には同じクラスだったが、中学になってクラスが離れていたので、ちょっと懐かしさもあって、し

ばしの歓談した。

話も一区切りつき、じゃ、そろそろ別れようかという時、私の後ろから「竹」というあだ名で呼ばれている友人がやってきた。

「よお、○○」

竹は私がいまだに呼ばれたくないあだ名を持ち出して、私の肩をポンと叩いた。そして通り過ぎながら、次に亀ちゃんの顔を確認すると「ああ、かめむしくんもいるじゃないかー」

と、これまたポンと亀ちゃんの肩を叩いたのである。

その瞬間だった。亀ちゃんが竹の胸倉を不意に掴むと、顔面に一発、強烈なパンチを食らわせた。

元々、野球をやっていて体も大きかった亀ちゃんに殴られ、竹はもんどりうってすっ飛ばされた。そして、次の瞬間には、ビックリした目を見開いて（実際には暗くて、細かな表情まで見えたわけではないのだが）、何も言わずにその場をそそくさと離れていった。

竹という男は常日頃から嫌味な言動が多くて、彼のことを気に食わないやつもたくさんいたと思うのだが、この事件を他の誰かに言うことはなかったらしく、何かの問題に発展することなく、その内に亀ちゃんが他の学校に転向して行ってしまう、それきりになった。亀ちゃんは日ごろは温厚で冗談の好きな男だったし、私からすれば誰かを殴るなどという過激な行動のできる人間ではなかった。だから、あの瞬間には大いに驚いたものの、その後も亀ちゃんのことを悪く思う気にはなれなかった。

むしろ嫌がることを不必要に刺激して、そのせいで痛い目にあつた竹の方に嫌悪感を抱くのがあった。

フロントガラスに張り付いたカメムシと格闘しながら、このカメムシも実際は柔和で温厚なヤツで、こうして私が不必要に刺激しようとするからいけないのかなと、思ったりもした。

後日、車の中に隠れてどこに行ったか分からなくなったカメムシ

が、数日後に姿を現した。今度は何とか車外へ放り出すことができた。

飛び去っていったカメムシの後ろ姿を見守った後、社内に座った。臭気は少しもしなかった。

自分が「竹」のようにならなかったことを、ホッと感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1070z/>

かめむし

2011年12月3日23時45分発行